

未来を生きる子どもたちへのメッセージ ④

『アドラーの著作について』

最近人間関係の難しさを感じることがあります。子どもどうし、子どもと教師、教師と保護者、学校と地域、お互いに人の心を理解し、時には譲り合い、時には打ち解けて関係を深めることが難しい時代となっています。話を十分聞かなかったこと（聞けなかったこと）が気持ちのすれ違う原因となり、とんでもない事件やトラブルを引き起こしています。

そんな時、皆さんに読んでほしい本があります。アルフレッド・アドラーの「嫌われる勇気」と「幸せになる勇気」です。この二冊はアドラー心理学の入門書であり、対話形式でかかれ、難しい心理学をやさしく解説しています。世界中で広く読まれたベストセラーの本です。アドラーはフロイト、ユングとならぶ心理学の三哲人で、「すべての悩みは、対人関係の悩みである」「すべての喜びもまた、対人関係の喜びである」「子どもたちはなぜ問題行動に走るのか？そこには隠された目的がある」「人間は、過去の原因に突き動かされる存在ではなく、現在の目的に沿って生きている。だから、過去がいまを決めているのではない。あなたのいまが過去を決めている」「世界はシンプルであり、人生もまた同じである。しかし、シンプルであり続けることは困難であり、そこでは日々が試練となる」このような箴言を残しています。

この夏に二つの歴史講座を頼まれました。いずれもテーマは「学校の歴史」。寺子屋から明治初めの義校を経て、尋常小学校ができるまでについてお話をします。明治維新の改革、富国強兵にしても、殖産興業にしても、様々な制度の整備にしても、これらの改革は江戸時代の寺子屋から続く、教育の伝統があったから可能となったものです。江戸時代終わりの寺子屋への就学率、寺子たちの識字率の高さは、幕末に日本を訪れた外交官が驚きました。寺子屋では「往来物」と言う、今でいうならQ&Aの一問一答式のテキストが広く使われていました。それらは「商売往来」や「農業往来」のようにやがて就く職業を意識した教科書となっていました。漢字や計算の他、手紙の書き方や修身（道徳）を学びました。寺子屋の学習成果や師匠がそのまま明治初めの義校と呼ばれた学校に引き継がれ、ここでは寺子屋の学習にプラスして西洋の学問も少し加わりました。師匠は訓導（教諭）となりました。義校は今の学校の体をなすようになり、始業や終業、規則や放課（授業の合間の休憩）などが決められました。現在の小学校以上に地域とのつながりが強く、地域の人たちの熱い思いや寄付などにより成立しました。この義校が何度かの小学校令の改正により、尋常科6年高等科2年、授業料が無償となり飛躍的に就学率が伸びていったのです。この教育制度による人材の育成が明治のマンパワーを生みだし、近代の日本の発展を創り上げました。

令和8年6月1日

津島市教育委員会
教育長 浅井厚視

未来を生きる子どもたちへのメッセージ ⑭

『博物館の二つの企画展』

以前にも書きましたが、私は清須市にある「あいち朝日遺跡ミュージアム」に定期的に通っています。企画展が替わるたびに見学に行きます。今回は「愛知の発掘調査 2025」を見てきました。尾張部（名古屋市）の弥生時代の住居（掘立柱建物）や墓（方形周溝墓）の様子、そこから出土した円窓付土器をはじめとした土器、三河部の前方後円墳とその石室の調査を知りました。今回の企画展は「一宮市萩原遺跡群」が6月21日まで展示されています。その中には、愛知県の発掘調査区で見つかった朝日銅鐸（清須市）と八王子銅鐸（一宮市）を見ることができ、銅鐸の音色と合わせて、弥生時代のワンターランドに入ります。出土状況がはっきり分かる珍しい銅鐸です。銅鐸が見つかった状況（逆さであったり、寝かせてあったり）の解説もありました。八王子銅鐸が見つかった日、私はその発掘現場、すぐ近くでトランシット（測量器）を立てていました。また銅鐸の取り上げをした時にはビデオカメラ係を務めました。東海地方の特色となっている紅殻を使った赤色の美しい土器（パレス土器）も一度見てほしいと思います。

もう一つは名古屋市の徳川美術館で行われている「豊臣兄弟！」の企画展です。今年のNHK大河ドラマに係る特別展で大変人気を集めています。信長・秀吉・家康の三英傑に加え、史上最高の補佐役（ナンバー2）豊臣秀長について展示が行われています。津島神社の楼門は秀吉が、南門は秀頼が寄進し、秀吉は尾張津島天王祭をこよなく愛し、大坂に移そうとしていたと言われています。そんな津島と深い関わりのある人たちの企画展です。三人の肖像画や書状、秀長愛用の茶入や兜を見てほしいと思います。調整型で人の話をよく聞いたと言われる秀長の人となりに関心をもって下さい。津島は信長・秀吉の家臣として活躍した津島衆がおり、賤ヶ岳の七本槍の加藤清正や平野長泰のように津島にエピソードを残す武将もいます。常設展では、徳川美術館には多くの合戦図屏風や刀、兜、鉄砲もあり、戦国時代の戦いの雰囲気味わうこともできます。自分の人生の中で徳川美術館の講堂で「郷土愛はふるさと検定から」という講演をしたことが大きな自慢となっています。美術館の講師専用入口から入れて頂きました。

この二つの企画展、博物館を5月・6月に訪ねていただきたいと思います。さらに全国にあるお城や城館を訪ね、兵どもの戦さのあとに関心をもっていただきたいと思います。私も御朱印に合わせ御城印も始めたところです。

令和8年5月1日
津島市教育委員会
教育長 浅井厚視